

学 位 論 文 要 旨

研究題目

補完代替療法に対する医学生への認識 —授業・臨床実習と鍼灸経験の影響—

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 環境病態制御系

医学教育学 (指導教授 成瀬 均)

氏 名 西村 理恵

日本の医学部では、補完代替療法 complementary alternative medicine (CAM) に関する教育は十分に行われていない。一方、CAM を自ら経験している医師は、より患者に CAM を勧めるとの報告があり、CAM の経験によって、患者による CAM の要求に対する対応が異なる可能性がある。そこで、医学部の学生に対し、CAM を受療した経験とその印象、および CAM についての知識および考え方・印象を調査した。

兵庫医科大学 2015 年度に第 4 学年だった学生を対象としてコホート研究を行った。対象の第 4 学年次に、CAM の受療の経験とその印象、および CAM に対する知識および考え方・印象について質問紙による調査を行った。調査後、CAM に関する授業を行い、授業後の CAM に対する考え方・印象については、授業の影響と経時的な変化を見るため、授業の後、および第 6 学年次にも調査をし、変化を検討した。さらにその調査結果を鍼灸の施術を受けた経験の有無で比較した。

126 名のうち、解析の対象は 92 名 (73%) であった。鍼灸の経験がある者は、14 名 (15%) であった。CAM についての考え方・印象は、第 4 学年授業後から第 6 学年次で、10 項目のうち 7 項目の平均ポイントが有意に低下していた。第 6 学年次では鍼灸経験有の者が無の者に対して、10 項目のうち「患者の意思を尊重する」、「代替療法は効果があり得る」などの 5 項目について平均ポイントが有意に高かった。

第 4 学年授業後と第 6 学年次との違いは、授業後からの 2 年間の影響、特に臨床実習の経験の影響を示すと考えられる。また、鍼灸経験の有無で、CAM の授業が及ぼす影響、臨床実習を経験して得られる影響が異なっていたと考えられる。

CAM の授業後や第 6 学年次に、鍼灸経験の有無による差を認めたことから、CAM についての考え方や印象が、将来的な CAM への対応にも違いが出る可能性が考えられた。医学教育モデル・コア・カリキュラムに掲げられた「多様なニーズに対応できる医師の養成」に対応するために、CAM を受療した経験のなさを補うための教育が必要と考えられた。